

■ 書 評 ■

社会認識教育学会編 『社会科教育の理論』

(ぎょうせい, 1989年)

梶 哲 夫

社会認識教育学会は、広島大学教育学部社会科教育学研究室に関係の深い方々によって構成されている。本書は、広島大学の伊東亮三、森分孝治、池野範男の三氏がこの学会の編集委員会の中心となって、広島大学教育学部教授・平田嘉三先生が、昨年(1989年)3月に定年退官されたことを記念して企画されたものである。平田先生は、私が昭和41年9月に東京教育大学附属中・高等学校から文部省の初等中等教育局中等教育課の教科調査官になった時、前任の教科調査官として在任されており、協力して昭和40年代の中・高等学校の社会科を担当し、苦楽をともにした。そして平田先生は全国社会科教育学会の、私は日本社会科教育学会のそれぞれ会長として、今回の社会科が直面した危機に対応し、全く同時に、広島大学と筑波大学を定年退官したのである。このようなわけであるから、平田先生の退官を記念するという性格をもった本書の書評をするということは、私にとって感慨深いものがある。

本書は、28名の社会科教育研究者の方々の論文によって成り立っているが、本書の構成と各論文のテーマは次の通りである。

I. 社会科教育の本質

1. 戦後社会科の再検討－挽歌がきこえるとき－
2. いまあらためて社会科とは何か－生活科の新設とかかわって－
3. 自他実現としての社会科教育論
4. 異文化理解と社会科教育
5. 社会科と歴史教育－津田左右吉の場合－
6. 上原専祿の世界史理論
7. 地理教育における地人相関論
8. 「人文地理」の性格－昭和22年版の検討－

II. 社会科教育の歴史

1. 牧口常三郎・郷土科の構想と教科論的意義

2. 複式教育における歴史教授法の史的展開
3. 社会科の出発と最初の社会科教科書
4. 初期社会科教育実践における生活学習から問題解決学習への転換
5. 「社会課程」を中心とした初期社会科の展開
6. 初期社会科実践における「生活」概念と「地域」概念—島根県の場合—
7. 富山県における初期社会科の試み
8. 高等学校社会科「世界史」の変遷とその特色—昭和35年版・45年版を中心にして—

Ⅲ. 外国の社会科教育

1. イギリス歴史教育における論争問題への一考察
2. 近代ドイツ歴史カリキュラム理論の成立
3. 西独歴史教育の人物化に関する一考察
4. 初等学校における「社会科学」と「社会学習」—アメリカ社会科教育成立史の断面—
5. アメリカ進歩主義社会科評価論
6. アメリカ社会科における民族的・文化的伝統の指導
7. アメリカ社会科におけるグローバルエデュケーションの視点と方法

Ⅳ. 社会科授業の構成

1. 概念探究学習論による小学校社会科授業の構成
2. 仮説設定に関する社会科指導とその教育技術
3. 生徒の既有認識を基礎とする歴史授業—中学校「縄文時代」の授業構成—
4. 中等社会科歴史授業改善の視点と方法
5. 地理学習における「環境」概念の批判的再構成

上記の論文のテーマから推測できるように、社会科教育研究の広範な領域にわたる研究成果が収録されている。全体約 385頁を28名で執筆ということで、各論文は量的には制約されているが、社会科教育研究の今日的状況を理解するうえで、示唆に富んだ内容の論文が多い。ただ、結果的にみると、小・中・高の各学校段階に関するものがアンバランスになっていること、特に第4章の社会科授業の構成が、小・中学校を中心としている点が目立つこと、また、中学校における地理、歴史、公民の各分野、高等学校の各科目についての配慮が必ずしも十分でないこと、などが惜しまれる。

なお、本書は、その序において、社会認識教育学会編集委員会として、本書の課題意識について、

「我が国において社会科教育が開始されて40年余、いまや社会科が解体されようとしている。低

学年社会科は生活科にとって代われ、高校社会科は地歴科と公民科に分けられることになった。社会科はなぜ解体されねばならないのか。……今日ほど、社会科教育をめぐる基礎的問題が投げかけられているときはない。……」

と述べるとともに、この「社会科と社会科教育学の危機に際し、改めて研究成果を世に問い、社会認識教育の確立と発展を期するものである。」と力強く提示されている。この問題意識に対して、本書の諸論文がどのように関連があるかについては、全体を詳細に検討しなくては論評することはできない。ただ、この問題意識に直接的に依拠した論文としては、上記のⅠの1「戦後社会科の再検討—挽歌がきこえるとき—」（伊東亮三氏）、Ⅰの2「いまあらためて社会科とは何か—生活科の新設とかかわって—」（中野重人氏）、Ⅰの3「自我実現としての社会科教育論」（宮本光雄氏）、及びⅡの8「高等学校社会科「世界史」の変遷とその特色—昭和35年版・45年版を中心に—」（星村平和氏）などをあげることができる。そして、この四つの論文は、今日の社会科が直面している課題を考究していくうえで、その論旨に賛否はあるにしても吟味すべき内容を提起している。特に星村氏の論文は、氏が「昭和35年版・45年版の作成に、文部省の教科調査官として直接担当されたのは平田嘉三氏である。本稿は、同氏の業績の評価という観点も含めて構想したが、不十分に終わっている」と述べられているが、高等学校社会科「世界史」に関心のある者にとって重要な意味をもった論文として紹介させていただく。

以上、本書に対する私の希望を述べたが、本書の性格からいって無理な注文かもしれない。むしろ、このような時期にかかる論文集がまとめられた意義を評価するとともに、社会科教育関係者が、自らの課題意識との関連から本書を読まれることを期待し、推薦したいと考える。

（早稲田大学）